

紹介:「ネパールのビール」

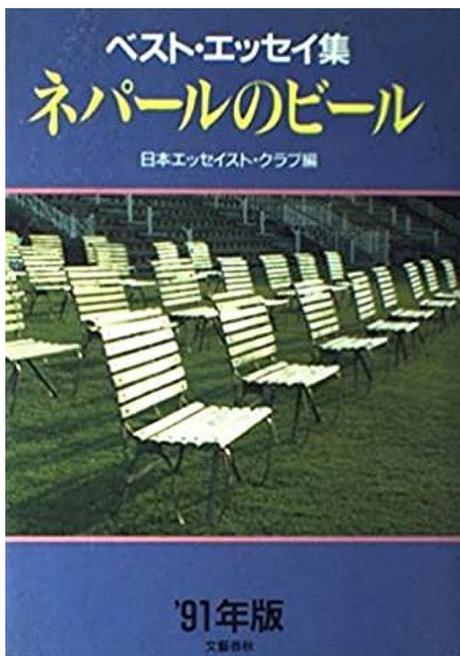
図書館で『ネパールのビール』というタイトルの本を見かけたので、借りてきて読んでみた。といっても、「ネパールのビール」は、338 ページもの大著に収められた多数のエッセイの一つで、ほんの4ページ余にすぎない短編であった。

いささか、あっけにとられたが、「ネパールのビール」そのものは、大著タイトルとして選んで冠されるのももったいな、感動的な一文芸春秋特集の意を酌むなら「泣かせる」一エッセイであった。

▼日本エッセイスト・クラブ編『ベスト・エッセイ集 ネパールのビール』文芸春秋, 1991

* 初出: 吉田直哉「ネパールのビール」, 『文芸春秋』1990年1月号(特集・私がいちばん泣いた話)

* [ネット掲載「ネパールのビール」全文](#)



■91年版『ネパールのビール』

1. 「ネパールのビール」梗概

著者は、1985(昭60)年夏、テレビ番組撮影(*1)のためドラカ村(*2)に行き、10日ほど滞在した。ドラカ村は海拔1500mで、斜面に家々が散在、人口は4500人。電気、水道、ガスなし。車道もなく、人びとは荷を背負って移動。

そのため、著者らは、車道終点のチャリコットからポーターを雇い、約1時間半かけ機材や食料をドラカ村まで運んでもらった。ビール(瓶ビール)は重いので、諦めた。

*1 NHK 衛星第1「NHK特集・ヒマラヤ・ドラカ村でいま」1986年1月15日10:15~11:00

*2 ドラカ村はチャリコットから約4km、いまは道路が付き、バス停もある。



■チャリコット〜ドラカ村

(Google)

撮影で大汗をかいたあと、著者が、ビールを冷やして飲みたいなと口にしたのを、村の少年チェトリが聞き、自分がチャリコットから買ってきてあげると申し出た。

チェトリ少年は遠くの小さな村出身で、ドラカ村に下宿して通学。下宿の薄暗い土間で自炊し、そこで勉強もよくしている。

そのチェトリ少年に、著者は夕方お金を渡し、チャリコットまでビールを買いに行ってもらった。少年は、夜の8時ころ、ビール5瓶を背負い戻ってきた。

翌日も、ビールを飲みたくなった著者は、ビール1ダースぶん以上のお金を渡し、買い出しを頼んだ。

ところが、出掛けた少年は、いつになっても帰ってこない。村人や学校の先生に相談すると、そんな大金をあげたのなら事故ではなく逃げたのだ、といわれた。これを聞き、著者は、大金で子どもの一生を狂わせてしまった、と深く後悔した。

いたたまれない気持ちで過ごした3日目の深夜、少年がヨレヨレ泥まみれで帰ってきた。チャリコットには3本しかなかったのだから、山を4つ越えたところで7本買い足したが、帰りに、ころんで3本割ってしまったと、ベソをかきながら3本の破片を見せ、釣銭を差し出した。

そんなチェトリ少年を抱きしめ、著者は泣き、そして深く反省した。

2. 「泣かせる」が特異ではない話

以上が、「ネパールのビール」の概要。たしかに感動的な「泣かせる」話だ。少年が、著者のために買ったのは瓶ビール10本。3本は割れてしまったとはいえ、重い。それらを背負い、山を4つも越え、持ち帰った。3日目の深夜まで、山道を何時間歩いたのか。お駄賃がもらえるとしても、たかがしれている。想像を絶する忍苦！

著者は、あろうことか、そんな少年を疑ってしまった。それだけに、帰ってきた少年を見て、著者が感動して泣き、深く反省したのは、もっともといえよう。

このように、「ネパールのビール」は感動的な泣かせるエッセイだが、そこで描かれているような出来事は、決して特異なものではない。ネパールを訪れたことのある日本人なら、多かれ少なかれ、幾度も同種の体験をしているはずだ。

3. 泣くに泣けない話

私自身も、「ネパールのビール」とほぼ同じころ、初めて訪ネしアンナプルナ・トレッキングをしたとき、同じようなことを体験した。



■アンナプルナ・マチャプチャレ山麓のダンプ

ス〜ガンドルン(Google)

ポカラから乗客鈴生リジープで川沿いをさかのぼり、ダンプス登り口で下車。さあ出発と前を見ると、絶壁のような急登。恐れをなし躊躇していると、たむろしていた地元の人々が次々と声をかけてきたので、人のよさそうな少年の一人にダンプスまでの荷揚げを頼んだ。年齢ははっきりしないが、日本の中学生くらい。小柄だが、重い荷物の大部分を背負ってくれた。日当は驚くほど安く、たしか2, 3百円くらい。それでも荷物を担ぎ、断崖のような山道をどんどん登って行った。

身軽になった私は、おとぎの国のような風景をながめ、写真を撮ったりしながら、休み休み登って行った。そんな私を、大きな荷を背負った地元の人たちが次々と追い抜いていく。女性の方が多く、背負っている荷の中にはコーラやビールのビンが何本も見られる。いかにも重そう。上方の村々に運び上げているのだ。

そうこうするうちに、荷物をもち先に行った少年のことが気になりだした。ダンプスの村で約束通り待っていてくれるだろうか？ まさか持ち逃げなどしていないだろうな、などと。わずかの手当てしか払っていないのに、こんな心配。われながら情けなかったが、ダンプスに着くと、そこで少年がちゃんと待っていてくれた。「ネパールのビール」の著者のように泣きはしなかったが、私も、大いに反省させられた。

ダンプスで1泊し、さらにランドルンで1泊、そして最終目的地のガンドルンまで登った。この間、道端の茶店やロッジでビン入りのコーラやビールが売られているのを目にしたが、それらを運び上げる地元女性の姿が目につかび、どうしても買って飲むことは出来なかった。

ところが、ガンドルンで歩き回り疲れ果てて、夕方、ロッジに戻ると、無性にビールが飲みたくなり、とうとう一本買って飲んでしまった。うまかった！ が、それだけに自分のあまりの意思の弱さが情けなく、やりきれない罪の意識にさいなまれることになった。

はるか下方の登り口から、いやひょっとしたらポカラの町から、女性や少年を含む荷揚げの人々が、何時間も、いや時には何日もかけて、背負い運び上げてきた重い瓶ビールや瓶コーラを、町よりは少し高いとはいえ当時の日本人にとっては全く気にならないほど安い値段で買い、一気に飲んでしまっただけのものか？ 私の一瞬の、のど越しの快は、ネパールの荷揚げの人々の労苦に見合うものなのか？ それは、事実上、彼らの人間としての尊厳を無視した傲慢な搾取を意味するのではないのか？

日本人とネパール地方住民との間には、1980年代中頃にはまだ、想像を絶するほどの生活格差があった。当時、ネパールの地方に行くと、日本人は多かれ少なかれ優越感に捉われるのを禁じえず、と同時に、そうした優越感から行動しているのではないかという自己猜疑に取り憑かれ、不安になる。たとえば、日本であれば、15歳の少年に徒歩往復3時間もかかる遠方に夕方ビールを買いに行かせようとは思ひもなかったであろうし、また、小柄な少年にわずか2、3百円のはした金で重い荷物を背負わせ急峻な山道を登らせようと思ひもなかったはずだ。

ここには、ビールを買ってきてくれた少年や荷揚げをしてくれた少年を疑ったことへの反省だけでなく、それらよりも根源的な自己の優越的地位そのものへのどうしようもない罪悪感があるように思われる。泣くに泣けない自責の念。

1980年代中頃のネパールは、訪ネ日本人の多くにとって、他者との関係において自己を改めて見直す試練の場でもあったのである。



■ガンドルン(1985)

4. 道徳教育教材としての「ネパールのビール」

「ネパールのビール」は、一見、起承転結の明確なエッセイなので、[道徳教育の課題文として多くの学校で使用](#)されてきた。対象は主に2年生。たとえば、次のような報告がある。

埼玉県立総合教育センター 第2学年〇組 道徳学習指導案

- 1 主題名：誠実な生き方
- 2 資料名：「ネパールのビール」出典（自分を考える）あかつき
- 4 ねらい：自分で考え、決めたことは誠実に実行し、その結果に責任をもとうとする心情を養う。

安芸高田市立向原中学校 道徳科指導案 第2学年指導者：上田 仁

主題名：人間のすばらしさ(よりよく生きる喜び)

教材名：「ネパールのビール」

筆者とチェトリくんの生き方の違いを対比させることを通して、人間の醜さに気づくと共に、人間の持つ強さや気高さを信じ、人間として誇りある生き方を見いだそうとする道徳的心情を育てる。

岩手県立総合教育センター 第2学年 道徳学習指導案 指導者：伊藤千寿

主題名：信頼感

内容項目：人間の強さと気高さ、生きる喜び

資料名：「ネパールのビール」

人間は信頼に値すると思う相手に対してであっても、状況によっては疑いの気持ちをもってしまうことがある。それは気持ちの弱さとも言えるが、よほど相手を知り尽くしているのではない限りは仕方がないことでもある。しかし、それを超える誠実さに触れることによって、疑ってしまったことを悔いたり、相手が信頼に値する人間であることを再認識したりすることもある。そのような経験を繰り返す中で、自分も弱さを持っていることを認めたくえでそれを乗り越えることのできる可能性を信じられるようになり、そのことがやがて喜びをもって生きていくことにつながると考える。

【参照】西部中学校「道徳の授業～ネパールのビール～」2018年2月28日

中学2年道徳科の課題文としてであれば、「ネパールのビール」がこのような読み方をされるのも、もったいかもしれない。

5. もう一つの読み方

しかしながら、その一方、人それぞれの考え方や行動は、その人の生まれ育ってきた環境に大きく規定され(存在被拘束性)、それが原因で解消の容易ではない誤解や対立が生じることにも目を向けるようにすることが必要であるように思われる。

異文化、異社会、異国家等の中の相互理解や和解は、そう容易ではない。「ネパールのビール」も、よく読めば、それを暗示しているように思われる。これは、永遠の課題と覚悟せざるをえない。

道徳教育では、学習レベルに応じた形で、相互理解の困難さ、その場合の対応の仕方――単純明快な解答のない場合の問題への対処の仕方――についても議論し、考えを深めていくべきではないだろうか。

谷川昌幸(C)

2021/08/06 at 10:49

カテゴリー: [ネパール](#), [社会](#), [教育](#), [文化](#), [旅行](#), [歴史](#)

Tagged with [ドラカ](#), [生活格差](#), [異文化](#), [道徳](#), [児童労働](#), [存在被拘束性](#)